
eturanちゃん

sofaisco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

eturanちゃん

【NZード】

NZ8390X

【作者名】

softainisco

【あらすじ】

はじめてのインターネットデビュー失敗例。

放送の一（前書き）

ジャンルは一応恋愛とありますがあ、ちょっと遠まわしな感じです。
自分で物語を書くのは初めてで、まだ慣れません。

「現在の閲覧者数は 0 人です」

ああ、数字つてやつはいつだつて無情。
僕はいさか暖まりすぎていたテンションをクールダウンをせよう
とする。

気づいたら脱いでしまっていたTシャツを、（ついでにズボンも）
拾い上げ、袖を通した。

ふう。なんだか服をきたらいい、少し冷静になってきたぞ。

深呼吸をしつつ、まだいまいち慣れない我が城（というか、マンションの一室）を見渡す。

まず、貧乏な一人暮らしだとこの、妙に広い。

まだいくつかダンボールは残ってるが、とりあえず商売道具だけはダンボールから出して、棚に並べてある。

ここからは見渡せないが、奥にはこれまた綺麗なバスルームとトイレもあるし、キッチンもある。しかも冷蔵庫と洗濯機は備え付けだった。

「・・・これで家賃1万はおかしいよなあ・・・。」

「コレディチマンエングスカ?！」

?!

今何か聞こえたよつた・・・・・？！

なんか、すっげー口ボツトっぽい声・・・・・！

そういう僕がこの物件にしたいと不動産屋さんに言ったとき、

「マジで？！」こにしてくれるの？！いやー、困つてたんだよこの幽霊ぶつけ・・ゲフンゲフン！とあく、助かるよーじゃあほら、これ書類！」

つて妙に喜んでたんだよな・・・。

お金をあんまりもつてないのに、こんな最高の物件が借りられるなんて、流石東京・・・！とか思つてたんだけど、もしかして・・・。

「さやあああつあ！お、オバケさんですかあ・・・！？」

「オバケ・・・？イヤ、アノ、コレホラー系ノ放送ナンデスカ・・・？！」

え、放送・・・？

声がした方をむいてみると、そこには先日友人から貰つた少し古い型のパソコン。

画面を覗きこむと、こう表示されていた。

「現在の閲覧者は 1 人です」

放送の2（前書き）

流れとかは考えてありますが、まだ手探り。自分で物語を書くのは
難しい・・・。

「現在の閲覧者数は
1人です」

画面に表示された文字を見て、思わず僕は「おおおー」と声を上げた。

かれこれ2時間、最初は自作曲を流しながら2日間かけて必死で考えた「クスつと笑える日常の出来事」を話していくけど、一向に増えない閲覧者数に腹がたつて、後半は思わず服を脱いで踊つたり、その状態で小学生の頃好きだつた女の子の名前を叫びながらエアー告白とかしてもずつと0人だつたのに・・・！

そう！今は閲覧者数とかよりも気になることがある！

ぽい声。

下手をしたら、れ、最悪呪い殺され……？！

「ひいいいいー悪霊退散、実家から持つてきただおお守つはー」「…………」

「悪靈……？声……？モシカシテ、「ボ一読みちゃん」ノコト
デスカ……？ドウヤラ、設定シテアルミタイデスシ……？」

「そう、こう、棒みたいな形した木彫りのお守り……！」

もう一度、声のした方を見ると、どうやらパソコンのスピーカーか

ら聞こえてきているようだ。

もう一度画面を注意深く見ると、横にあるコメント欄といつといくつかコメントが書き込まっているのが見える。

「あれ・・・これ、さつき聞こえて来た声が言つてた言葉だ・・・。
もしかして、コメントをさつきから誰かが読んでくれて・・・、
つてこの部屋僕しか・・・！」

「ダカラ、コノ声ハ アナタノパソコン ガ コメント ヲ読ンデ
ル声デスヨ・・・。自分デ生放送ヤツテルノニ、ソンナコトモ知ラ
ナイデスカ・・・？」

・・・・・?

「え、つまり、僕のパソコンがここに来たコメントを読んでくれて
るってこと?！」

「マンマ私ガ言ツタコト繰リ返シマシタネ。ソウデスヨ。」

え、 そうなの? 今のパソコン、 激しい・・・。

緊張していたのか強ばっていた身体から力が抜けて、僕は思わずヘタリ込んだ。

パソコンのセッティングは全部前の持ち主である友人に任せていた
ので、何も把握していない状態だったのだ。

しかし、ということは今の今まで僕は見知らぬ人の前でこんな、情けない姿を晒したということに・・・?と凹んでいるところに、またもある声が聞こえてきた。

「ファアアアア・・・。何モヤラナイシ、ツマラナイデス・・・。モ

ウソロソロ、私ハオチマスネ・・・

「ちよ、ちよっと待つてえええ！今、今ナイスな笑える小噺をしますから、もう少し、もう少し待つて！ええっと、なんだっけ・・・！なんてこいつた頭が真っ白に・・・？」

あたふたしてゐる間にも、閲覧数が点滅（していふよつな氣）が！とりあえず、僕は横に置いてあるオーディオのリモコンに手を伸ばし、場繫ぎ的に再生ボタンを押し、なんとか言葉を紡ぎ出すと試みる。

「えつと・・・、そうだ思い出した！えつと、この前、テレビのリモコンをですね・・・！」

僕が一日かけて考えた、「クスッと笑える小噺」を始めるべく、それを遮る様に「ボー読みちゃん」が声を発します。

「モウ、本当二眠・・・。オヤ、ナンダカ面白イ音楽ガ流レテマスネ・・・。」

「やう、リモコンを眠りにつかせて、親なんだが、面白い音楽を・・・。え、この曲ですか？」

なんとなく閲覧者様がこちらに興味を持つてくれたのを感じ取り、僕は姿勢をたたず。

「クスッと笑える小噺」が出来ないのは少し寂しいけど、お客様至上主義に徹することにじよづ・・・！

「モノ曲、ダレノ何テ曲テスカ？」

「えっと、この曲は・・・すいません。曲名はまだないんです。あと、これは僕の作った曲です。」

「ナンドカ、眠ル前ニ聴クノニ ピッタリ ナ感ジテスネ。」

「ありがとうございます！そういう注文に備えて作ったので、そう言われると嬉しいです！」

知人や友人から自分の作った曲を褒めてもらつたことはあつたけど、見知らぬ人からこうやって感想を言われるのは新鮮で、思わず頬が緩んだ。

これがインターネットの楽しさなんだろうか。

「エエ、次ノ放送ハ、モット音楽ヲ流シテ欲シイデス。ソレデハ。」

「あ、ちょっと待、・・・。」

僕が何か意味のある言葉を発する前に、再び0になる閲覧者数。しかし、次の放送を期待するようなコメントをしてくれたような・・・。

「・・・これ、次も来てくれるってことかな・・・？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8390x/>

eturanちゃん

2011年10月23日03時08分発行